

“Kaltxi” — ナヴィ語への招待

『アバター』

ジェームズ・キャメロン監督

ツァヒク「スカイピープルに教えても頭がいっぱいで何も入れようとしなない」

ジェイク「大丈夫。俺の頭は空っぽだ」

映画を見る楽しみは映像表現だけではない。言葉もその一つである。映画『アバター』に登場する惑星パンドラに住むナヴィはナヴィ語を話す。このナヴィ語が人間に習得可能な言語であることは映画の冒頭のほうで、新しく赴任したアバター・ドライバーのノームが長年ナヴィの研究を続けているグレース博士とナヴィ語で会話をしたことからわかる。このことが教えてくれるのは、発音に必要な身体に関して人間とナヴィは共通点を持ち、人間の言語と共通する文法体系をナヴィ語も持っているということである。更にナヴィは社会性を有する集団を構成しているということも、ノームのナヴィ語に対してグレースが「表現が硬いけど」と言ったことからわかる。つまり、ナヴィ語は文脈や相手に応じて使い分けをしなければならないということが示唆されるのである。

ナヴィ語が人間の言語と共通点を持つと書いたが、これは当り前の話で、実はジェームズ・キャメロン監督に依頼された言語学者のポール・フロマーが人類の様々な言語を基にしてコミュニケーション可能な音韻、形態、統語システムを有する言語として創作したからである (<http://www.learnnavi.org/>)。フロマーは人類の様々な言語——言語の多様性と普遍性についてはマーク・C・ベーカー著『言語のレシピー 多様性にひそむ普遍性をもとめて』[岩波現代文庫]——に存在する要素、すなわち、音を構成する要素、語を作る手段、文を構成する語と語の関係を表す手段などをハイブリッド化した人工言語を創造した。

ナヴィ同士が話すナヴィ語の会話を聞いていると日本語にはない特徴的な発音が聞こえてくる。その一つとして放出音 (ejective) が挙げられる。この発音はナヴァホ語——太平洋戦争時硫黄島戦などナヴァホ語が日本軍に対する暗号として用いられたことはサイモン・シン著『暗号解説』[新潮文庫]に詳しい——などのアメリカ先住民族の言語やハウサ語などのアフリカの言語で用いられる(楽器の演奏を口で模して行うヒューマン・ビートボックスにも類似した音の作り方がある)。例えば、「こんにちは」を意味する表題の“Kaltxi”の“tx”であれば“t”の

発音の構えのまま止めた息を爆発的に放出することで発せられる音である。

文法面において日本語との共通点は、日本語と同じように助詞に当たる言葉が名詞につき、語順が自由に変えられる点が挙げられる。一方相違点は、日本語とは異なり、英語と同様に動作を行ったり感じたりする主体を言語的に明示する点である。このことは、ナヴィ語の“oe-ri txal tisraw si”（わたしは - 背中 - 痛み - する）が日本語の「背中が痛い」に相当することからもわかる。ナヴィ語では痛みを感じる主体である話し手が表現対象として客観的に捉えられ言語的に明示されるのに対して、日本語では主体である「わたしは」を明示しない表現が好まれる（事態の主体の言語化・非言語化に関する詳細な議論に関しては廣瀬・長谷川著『日本語から見た日本人－主体性の言語学』[開拓社]。言語学に基づき日本語が英語などの言語と比較され、従来の日本人論が批判的に検証されている）。

言語研究者の立場からいうと、『アバター』が映画史上画期的なのは、3Dなどの映像表現技術にあるのではなく、ナヴィの言語と文化の創造にある。物好きというのはいるもので、ナヴィ語の学習者がいる（アメリカのドラマシリーズ『Glee』シーズン2にナヴィ語で話す場面がある）。辞書と文法と音韻が整備されたサイト（<http://www.learnnavi.org/>）も立ち上がり、ユーチューブでも様々な動画がアップロードされている。19世紀終わりに世界平和を目的にザメンホフによって創造された人工言語エスペラント語とは異なる出自を持つ森の民の言語ナヴィ語がネット空間や現実世界において今後どのような発展を遂げていくかは興味深いところである。

執筆者紹介

加納 満

教育開発系准教授。専門領域は、言語学・日本語教育。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『アバター [DVD]』 ジェームズ・キャメロン監督 20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパン 2009年 3,490円

『言語のレシピ：多様性にひそむ普遍性をもとめて』 マーク・C. ベイカー著 郡
司隆男訳 岩波書店（岩波現代文庫） 2010年 1,491円
『暗号解説 上・下』 サイモン・シン著 青木薫訳 新潮社（新潮文庫） 2007年
620, 660円
『日本語から見た日本人：主体性の言語学』 廣瀬幸生、長谷川葉子著 開拓社
2010年 1,890円

[ブックガイド目次へ](#)